

ある心の風景

梶井基次郎



ある心の風景

一

喬たかしは彼の部屋の窓から寝静まった通りに凝視みっていた。起きている窓はなく、深夜の静けさは暈かさとなつて街燈のぐるりに集まつていた。固い音が時どきするのは突き当つていく黄金虫ぶんぶんの音でもあるらしかった。

そこは入り込んだ町で、昼間でも人通りは尠すくなく、魚の腹綿はらわたや鼠の死骸は幾日も位置を動かさなかつた。両側の

家々はなにか荒廃していた。自然力の風化して行くあとが見えた。紅殻べんがらが古びてい、荒壁の塀は崩れ、人びとはそのなかで古手拭のように無気力な生活をしているように思われた。喬の部屋はそんな通りの、卓子テーブルで云うなら主人役の位置に窓を開いていた。

時どき柱時計の振子の音が戸の隙間から洩れてきこえて来た。遠くの樹に風が黒く渡る。と、やがて眼近めぢかい夾竹桃きょうちくとうは深い夜のなかで揺れはじめるのであった。喬はただ凝視みっている。——暗のなかに灰白ほのく浮かんだ家の額ひたいは、そうした彼の視野のなかで、消えてゆき現わ

れて来、喬は心の裡うちに定かならぬ想念のまた過ぎてゆく
 のを感じた。蟋蟀こころぎが鳴いていた。そのあたりから——と
 思われた——微かすかな植物の朽くちてゆく匂いが漂って来
 た。

「君の部屋は仏蘭西フランスの蝸牛エスカルゴの匂いがするね」

喬のところへやって来たある友人はそんなことを云つ
 た。またある一人は

「君はどこに住んでも直ぐその部屋を陰鬱いんうつにしてしま
 うんだな」と云った。

いつも紅茶の滓かすが溜かすっているピクニック用の湯沸器。

帙ちつと離ればなれに転っている本の類。紙切れ。そしてそんなものを押しわけて敷かれています蒲団。喬はそんななかで青鷺あおさぎのように昼は寝ていた。眼が覚めては遠くに学校の鐘を聞いた。そして夜、人びとが寝静まった頃この窓へ来てそとを眺めるのだった。

深い霧のなかを影法師のように過ぎてゆく想念がだんだん分明になって来る。

彼の視野のなかで消散したり凝ぎょうしゅう聚しゅうしたりしていた風景は、ある瞬間それが実に親しい風景だったかのように、またある瞬間は全く未知の風景のように見えはじめる。

そしてある瞬間が過ぎた。——喬にはもう、どこまでが彼の想念であり、どこからが深夜の町であるのか、わからなかった。暗のなかの夾竹桃はそのまま彼の憂鬱であった。物陰の電燈に写し出されている土塀、暗と一つになっっているその陰影。観念もまたそこで立体的な形をとっていた。

喬は彼の心の風景をそこに指呼^{しこ}することができると思った。

二

どうして喬がそんなに夜更よふけて窓に起きているか、それは彼がそんな時刻まで寝られなからでもあった。寝るには余り暗い考えが彼を苦しめるからでもあった。彼は悪い病気を女から得て来ていた。

ずっと以前彼はこんな夢を見たことがあった。

——足が地じ脹はればをしている。その上に、噛かんだ歯がたのようなものが二列ふたならびついている。脹れはだんだんひど

くなつて行つた。それにつれてその痕はだんだん深く、まわりが大きくなつて来た。

あるものはネエヴルの尻のぞのようである。盛りあがつた気味悪い肉が内部から覗のぞいていた。またある痕は、細長く深く切れ込み、古い本が紙魚しみに食い貫ぬかれたあとのようになっている。

変な感じで、足を見ているうちにも青く脹れてゆく。痛くもなんともなかった。腫物はれものは紅あかい、サボテンの花のようである。

母がいる。

「あああ。こんなになった」

彼は母に当てつけの口調だった。

「知らないじゃないか」

「だって、あなたが爪でかたをつけたのじゃありませんか」

母が爪でお圧したのだ、と彼は信じている。しかしそう云ったとき喬に、ひよつとしてあれじゃないだろうか、という考えがひらめ閃いた。

でもまさか、母は知ってはいないだろう、と気強く思
い返して、夢のなかの喬は

「ね！ お母さん！」と母を責めた。

母は弱らされていた。が、しばらくしてとうとう

「そいじゃ、癒なおしてあげよう」と云った。

二列の腫物はいつの間にか胸から腹へかけて移っていた。どうするのかと彼が見ていると、母は胸の皮を引張って来て（それはいつの間にか、萎しぼんだ乳房ちぶさのようにならんでいた）一方の腫物を一方の腫物のなかへ、ちよほど釦ボタンを嵌はめるようにして嵌め込んでいった。夢のなかの喬はそれを不足そうな顔で、黙って見ている。

一対ずつ一対ずつ一列の腫物は他の一列へそういうふ

うにしてみな嵌はまってしまった。

「これは××博士の法だよ」と母が云った。釦の多いフロックコートを着たようである。しかし、少し動いてもすぐ脱はずれそうで不安であった。――

何よりも母に、自分の方のことは包み隠して、気強く突きかかって行つた。そのことが、夢のなかのことながら、彼には応こたえた。

女を買うということが、こんなにも暗く彼の生活へ、夢に出るまで、浸しみ込こんで来たのかと喬は思った。現実の生活にあつても、彼が女の児この相手になっている。そ

してその児が意地の悪いことをしたりする。そんなときふと邪慳じゃけんな娼婦しょうふは心に浮うかび、喬たまたは堪らない自己嫌厭けんおに墮おちるのだった。生活に打ち込まれた一本の楔くさびがどんなところにまで歪ひずみを及ぼして行っているか、彼はそれに行き当る度たびに、内面的に汚れている自分を識しってゆくのだった。

そしてまた一本の楔、悪い病気の疑いが彼に打ち込まれた。以前見た夢の一部が本当になったのである。

彼は往来で医者いしやの看板かんばんに気をつける自分を見出すようになった。新聞の広告をなにげなく読む自分を見出すよ

うになった。それはこれまでの彼が一度も意識してした事のないことであつた。美しいものを見る、そして愉快になる。ふと心のなかに喜ばないものがあるのを感じて、それを追つてゆき、彼の突きあたるものは、やはり病氣のことであつた。そんなとき喬は暗いものに到^{いた}るところ待ち伏せされているような自分を感じないではいられなかつた。

時どき彼は、病める部分を取り出して眺めた。それはなにか一匹の悲しんでいる生き物の表情で、彼に訴えるの
だつた。

三

喬は度たびその不幸な夜のことを思い出した。——
彼は酔っ払った嫖客や、嫖客を呼びとめる女の声の
聞こえて来る、往来に面した部屋に一人坐っていた。勢
いづいた三味線や太鼓の音が近所から、彼の一人の心に
響いて来た。

「この空気！」と喬は思い、耳を敬てるのであった。
ズロズロと履物の音。間を縫って利休が鳴っている。

——物音はみな、あるもののためには鳴っているように思えた。アイスクリーム屋の声も、歌をうたう声も、なにからなにまで。

小婢こおんなの利休の音も、すぐ表ての四条通ではこんなふうには響かなかつた。

喬は四条通を歩いていた何分か前の自分、——そこで自由に物を考えていた自分、——と同じ自分をこの部屋やのなかで感じていた。

「とうとうやって来た」と思った。

小婢が上って来て、部屋には便利炭ろうの蠟ろうが匂った。喬

は満足に物が云えず、小婢の降りて行ったあとで、そんなすぐに手の裏返したようになれるかい、と思うのだった。

女はなかなか来なかった。喬は屈託くつたくした気持で、思いついたまま、勝手を知ったこの家の火の見へ上って行くうと思つた。

朽ちかけた梯子はしごをあがろうとして、眼の前の小部屋の障子しょうじが開いていた。なかには蒲団が敷いてあり、人の眼がこちらを睨にらんでいた。知らぬふりであがって行きながら喬は、こんな場所での気強さ、と思つた。

火の見へあがると、この界限かいわいを覆おおっているのは暗い藁いらかであつた。そんな間から所どころ、電燈をつけた座敷が簾越すだれごしに見えていた。レストランの高い建物が、思わぬところから頭を出していた。四条通はあすこかと思つた。八坂神社やさかの赤い門。電燈の反射をうけて灰ほのかに姿を見せている森。そんなものが藁越しに見えた。夜の靄もやが遠くはぼかしていた。円山まるやま、それから東山ひがしやま。天の川がそのあたりから流れていた。

喬は自分が解放されるのを感じた。そして、「いつもここへは登ることに極きめよう」と思つた。

五位ごいが鳴いて通った。煤黒すすい猫が屋根を歩いていた。喬たけは足もとにすが闌れた秋草の鉢を見た。

女は博多から来たのだと云った。その京都言葉に変な訛なまりがあった。身み嗜たしみが奇麗きれいで、喬は女にそう云った。そんなことから、女の口はほぐれて、自分がまだ出てそうそうだのに、先月はお花を何千本売って、この廓くわで四番目なのだと云った。またそれは一番から順に検番に張り出され、何番かまではお金が出る由云った。女の小ざっぱりしているのはそんな彼女におかあはんというのが気をつけてやるのであった。

「そんなわけやでうちも一生懸命にやってるの。こないだからもな、風邪かぜひいとるんやけど、しんどうてな、おあはんは休めというけど、うちは休まんのや」

「薬は飲んでるのか」

「うちでくれたけど、一服五銭でな、……あんなものな
んぼ飲んでもきかせん」

喬はそんな話を聞きながら、頭ではSーという男の話にきいたある女の事を憶おもい浮かべていた。

それは醜みにくい女で、その女を呼んでくれと名を云うときは、いくら酔っていても羞はずかしい思いがすると、Sー

は云っていた。そして着ている寝間着の汚きたないこと、それは話にならないよと云った。

S―は最初、ふとした偶然からその女に当り、その時、よもやと思っていたような異様な経験をしたのであった。その後S―はひどく酔ったときなどは、気持にはどんな我慢がまんをさせてもという気になってついその女を呼ぶ、心が荒くなつてその女でないと満足できないようなものが、酒を飲むと起こるのだと云った。

喬はその話を聞いたとき、女自身に病的な嗜好しこうがあるのなればとにかくだがと思い、畢竟ひっきょうくるわ廓での生存競争が、

醜いその女にそのような特殊なことをさせるのだと、考
えは暗いそこへ落ちた。

その女は瘰癧おしのように口をきかぬとS―は云った。もつ
とも話をする気にはならないよと、また云った。いった
い、やはり瘰癧の、何人位の客をその女は持っているのだ
ろうと、その時喬は思った。

喬はその醜い女とこの女とを思い比べながら、耳は女
のお喋りしゃべりに任せていた。

「あんたは溫柔おとなしいな」と女は云った。

女の肌は熱かった。新しいところへ触れて行くたびに

「これは熱い」と思われた。――

「またこれから行かんならん」と云って女は帰る仕度したくをはじめた。

「あんたも帰るのやろ」

「うむ」

喬は寝ながら、女がこちらを向いて、着物を着ておるのを見ていた。見ながら彼は「さ、どうだ。これだ」と自分で確かめていた。それはこんな気持であった。――平常自分が女、女、と想っている、そしてこのような場所へ来て女を買うが、女が部屋へ入って来る、それまでは

まだいい、女が着物を脱ぐ、それまでもまだいい、それからそれ以上は、何が平常から想っていた女だろう。

「さ、これが女の腕だ」と自分自身で確める。しかしそれはまさしく女の腕であって、それだけだ。そして女が帰り仕度をはじめた今頃、それはまた女の姿をあらわして来るのだ。

「電車はまだあるか知らん」

「さあ、どうやら」

喬は心の中でもう電車がなくなっていてくれればいいと思った。階下のおかみは

「帰るのがお厭いやどしたら、朝まで寝とおいやしても、うちはおかましまへん」と云うかも知れない。それより「誰ぞをお呼びやおへんのどしたら、帰っとくれやす」と云われる方が、と喬は思うのだった。

「あんた一緒に帰らへんのか」

女は身じまいはしたが、まだぐずついていた。「まあ」と思い、彼は汗づいた浴衣ゆかただけは脱ぎにかかった。

女は帰って、すぐ彼は「ビール」と小婢に云いつけた。

ジュ、ジュクと雀の啼声なきごえが樋とゆにしていた。喬は朝靄あさもやの

なかに明けて行く水みずしい外面を、半分覚めた頭に描えがいていた。頭を挙げると朝の空気のなかに光の薄れた電燈が、睡ねむっている女の顔を照していた。

花売りの声が戸口に聞こえたときも彼は眼を覚ました。新鮮な声、と思った。榊さかきの葉やいろいろの花にこぼれている朝陽あさひの色が、見えるように思われた。

やがて、家々の戸が勢いよく開いて、学校へ行く子供の声が路に聞こえはじめた。女はまだ深く睡っていた。

「帰って、風呂へ行つて」と女は欠伸あくびまじりに云い、束髪そくはつの上へ載のせる丸く編んだ毛を掌てのひらに載せ、「帰らしても

らいまっさ」と云つて出て行つた。喬はそのまままた寝入つた。

四

喬は丸太町の橋の袂たもとから加茂磧かもがわらへ下りて行つた。磧に面した家々が、そこに午後の日蔭を作つていた。

護岸工事に使う小石が積んであつた。それは秋日の下で一種の強い匂いをたてていた。荒神橋の方に遠心乾燥器が草原に転つていた。そのあたりで測量の巻尺が光つ

ていた。

川水は荒神橋のしもて下手ですだれ簾のようになって落ちていている。夏草の茂った中洲ななすのかなた彼方で、浅瀬は輝きながらサラサラ鳴っていた。鶴せきれいが飛んでいた。

背を刺すような日表ひなたは、蔭となるとさすが秋の冷たさがせくぐま跼まっていた。喬はそこに腰を下した。

「人が通る、車が通る」と思った。また

「街では自分は苦しい」と思った。

川向うの道を徒歩や車が通っていた。川添かわぞいの公設市場。タールの樽が積んである小屋。空地では家を建てるのか

人びとが働いていた。

川上からは時どき風が吹いて来た。カサコソと彼の坐っている前を、皺しわになった新聞紙が押されて行った。小石に阻はままれ、一ひとしきり風に堪えていたが、ガツクリ一つ転ると、また運ばれて行った。

二人の子供に一匹の犬が川上の方へ歩いて行く。犬は戻って、ちよつとその新聞紙を嗅かいで見、また子供のあとへついて行った。

川のこちら岸には高い櫟けやきの樹が葉を茂らせている。喬は風そよに戦たたかいでいるその高い梢こずえに心は惹ひかれた。やや

しばらく凝視^{とま}っているうちに、彼の心の裡のなにかがその梢に棲り、高い気流のなかで小さい葉と共に揺れ青い枝と共に撓^{たわ}んでいるのが感じられた。

「ああこの気持」と喬は思った。「視^みること、それはもうなにかなのだ。自分の魂の一部分あるいは全部がそれに乗る移ることなのだ」

喬はそんなことを思った。毎夜のように彼の坐る窓辺、その誘惑——病^{びょううつ}鬱^{うつ}や生活の苦渋が鎮められ、ある距^{へだた}りをおいて眺められるものとなる心の不思議が、こここの高い櫂の梢にも感じられるのだった。

「街では自分は苦しい」

北には加茂の森が赤い鳥居を点じていた。その上に遠い山々は累かさなって見える。比叡山ひえいざん——それを背景にして、紡績工場の煙突が煙を立登らせていた。赤煉瓦れんがの建物。ポスト。荒神橋には自転車が通り、パラソルや馬力が動いていた。日蔭は磧に伸び、物売りのラツパが鳴っていた。

五

喬は夜更よふけまで街をほつつき歩くことがあった。

人通りの絶えた四条通は稀まれに酔っ払いが通るくらいの
もので、夜霧はアスファルトの上までおりて来ている。

両側の店はゴミ箱を舗道に出して戸を鎖とぎさしてしまっている。
所どころに嘔吐へどがはいてあったり、ゴミ箱が倒され
ていたりした。喬は自分も酒に酔ったときの経験は頭に
上り、今は静かに歩くのだった。

新京極しんきょうごくに折れると、たてた戸の間から金盃かなだらいを持って風呂へ出かけてゆく女の下駄が鳴り、ローラースケートを持ち出す小役員、うどんの出前を運ぶ男、往来の真中で棒押しをしている若者などが、異様な盛り場さかばの夜更けを見せている。昼間は雑閨ざつとのなかに埋うもれていたこの人びとはこの時刻になって存在を現わして来るのだと思えた。

新京極を抜けると町はほんとうの夜更けになっている。昼間は気のつかない自分の下駄の音が変に耳につく。そしてあたりの静寂は、なにか自分が変なたくらみを持

って町を歩いているような感じを起こさせる。

喬は腰に朝鮮の小さい鈴を提さげて、そんな夜更け歩いた。それは岡崎公園にあつた博覧会の朝鮮館で友人が買って来たものだった。銀の地に青や赤の七宝しっぽうがおいてあり、美しい枯れた音がした。人びとのなかでは聞こえなくなり、夜更けの道で鳴り出すそれは、彼の心の象徴のように思えた。

ここでも町は、窓辺から見る風景のように、歩いている彼に展ひらけてゆくのであつた。

生まれてからまだ一度も踏まなかつた道。そして同時

に、実に親しい思いを起こさせる道。——それはもう彼が限られた回数通り過ぎたことのあるいつもの道ではなかつた。いつの頃から歩いているのか、喬は自分がこことわの過ぎてゆく者であるのを今は感じた。

そんな時朝鮮の鈴は、喬の心を顫ふるわせて鳴った。ある時は、喬の現身うつせみは道の上に失われ鈴の音だけが町よぎを過るかと思われた。またある時それは腰のあたりに湧き出して、彼の身体の内部へ流れ入る澄み透った溪流のように思えた。それは身体を流れめぐって、病気に汚れた彼の血を、洗い清めてくれるのだ。

「俺はだんだん癒なおってゆくぞ」

コロコロ、コロコロ、彼の小さな希望は深夜の空気を清らかに顫ふるわせた。

六

窓からの風景はいつの夜も滃かわらなかつた。喬にはどの夜もみな一つに思える。

しかしある夜、喬は暗やみのなかの木に、一点の蒼白あおしろい光を見出した。いずれなにかの虫には違ちがいなと思えた。

次の夜も、次の夜も、喬はその光を見た。

そして彼が窓辺を去って、寢床の上に横になるとき、彼は部屋のなかの暗にも一点の^{りんこう}燐光を感じた。

「私の病んでいる生き物。私は暗闇のなかにやがて消えてしまう。しかしお前は睡らないでひとりおきているように思える。そとの虫のように……青い燐光を燃しながら……」

日本文学電子図書館

「梶井基次郎 ちくま日本文学028」

著 者：梶井基次郎

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2008年11月10日 第1刷

日本文学電子図書館